

伊香保大会 特別支援分科会のかんたんな報告

報告者：志田竜彦（岩手・中・特別支援）

分科会のコマは大会3日目の午前9から11時までの1コマ。資料は13本出され、そのうち発表は10本。

今回の分科会では、「はじめて○○の担当になっての1学期のあれこれ」という内容の資料が4本あり、いずれも、それぞれ「はじめての病弱支援担当やはじめての特別支援学級の担当で子どもたちとの出会い」「それまでの自分の仕事や出会ってきた子どもたちとの反応のちがいを戸惑い」「そんな状況に、時に歩き、走り、立ち止まりながら、それでも前向きに進もうとするドラマや教材ネタ」を描いた、いい資料、いい発表でした。また、これらの発表に対する中堅・ベテランの先生方のコメントも温かく、だれもが前向きになれるそんな雰囲気の方科会になってしまいました。

そんな、ナイスな資料はこちら。

「笑顔の瞬間」大阪・石井卓也さん（病弱支援学校 訪問教育）

肢体不自由の特別支援学校に勤務していた石井さん。4月からまったく経験のない病弱支援学校へ。しかも、未知の世界である「訪問教育」の担当になってしまい、はたして、「自分に何ができるのか」からはじまった1学期の軌跡。

「イモリからはじまったウズラ日記」～似ている親子からウズラへ～

兵庫・森永裕文さん（小 特別支援 自閉・情緒）

今年度から小学校の特別支援学級自閉・情緒の担当になった森永さんの目の前に現れたのは、これまた、今年度からこのクラスに入級したADHDの裕太(仮名)くん。この子の興味と関心を引き出して、となりとなりと教材が移り変わっていくさまは、まさに今はやりのアクティブラーニングそのもの。

「ボクのおひさま日記」1学期 京都・古谷隆明さん（小 特別支援）

本人が望んでいない校内人事で思いがけず特別支援学級の担任になったけれど、古谷さんのやることにブレはない。子どもとの関係

づくり、ものづくり、仮説実験授業。じつにいろいろな授業をしかけ、それに対する子どもたちの反応を冷静に観察している。なぜか、時々自身釣りの記録もあり、自分の時間を大事にしながら仕事をしている様子が伝わってくる。

「特別支援1年目でも、たのしく！」

～普通学級でのたのしい授業のあれこれの応用・活用～

北海道・四ヶ浦友季さん（小 特別支援）

特別支援学級でも普通学級でやったことがこんなに使える、という実に役に立つネタの紹介。発表者のキャラに引き込まれ、時間を忘れて聞き入り思わず、分科会の終了時刻をオーバー。

この他、福井・松ロー巳さんが紹介してくださった「かたろーぐ」というゲームは、コミュニケーションゲーム。特別支援学級のSSTとしても使えそう（もちろん、一般学級やオトナ同士でも）。特に、このゲームセットさえあれば、ゲームにするネタは、メニューでもカタログでも何でもOK。特別支援情緒クラスの子が苦手な「選ぶ」「推理する」「説明する」という活動が、その子の興味のあるネタを使って展開できるのが魅力的。

「ひと手間ラッピングのすすめ」（名古屋・市原千明さん・特別支援学校）は、ものづくりをゴミつくりにしないうための、誰にでも真似ができる一工夫の具体策とその思想。同じく「数学教師を辞めて特別支援学校に転任したら数学を本当に使うようになりました。」数学も科学も「使ってなんぼ」。同じく「特別支援学校の現場から」は、特別支援教育のキーワードは、他者理解、想像力、共通点であると思わせてくれる。

「月並みおりぞめ発表会 6月 覚悟（？）のあじさい」（群馬・川島滋弘さん・小 特別支援）は、作り方は知らないけれど、画像から作り方を推理した川島さん。見事に「おりぞめ あじさい」を再現。そして…

今回「はじめての分科会参加者が司会役を務める」というハプニングからはじまった特別支援分科会。参加者の支援・協力により、ステキな分科会になりましたことを、この誌面をお借りして感謝申し上げます。